

周 乗風 提出 学位申請論文

『ビジネス日本語における感謝表現』 審査報告

論文の内容の要旨

本論文は、多彩なビジネス言語資料を取り上げ、日中ビジネス場面における感謝表現の使用実態および異同、ビジネス文書史における感謝表現の史的変遷、また中国の高等教育機関の現行のビジネス日本語教科書における感謝表現の扱いと改善点を考察したものである。本論は、序章、第一部「ビジネス場面における感謝表現の日中対照研究」、第二部「近現代商用文における感謝表現」、第三部「ビジネス日本語教科書における感謝表現の扱い」、終章から成る。

序章「感謝表現の先行研究と本論の概要」では、本論文の研究の目的と研究方法について述べ、従来の感謝表現の分類を踏まえ、日中対照研究の観点から、感謝表現を「感謝型表現」「謝罪型表現」「事実関係の叙述の表現」「その他の感謝表現」に分類し、ビジネス文書史における感謝表現を位置づけた上で本研究で使用する各種ビジネス言語資料を概観している。

第一部は第一章「ビジネス文書における感謝表現の日中対照研究」、第二章「企業ウェブサイトにおける感謝表現—銀行ホームページを中心に—」、第三章「ビジネス会話における感謝表現の対照研究—日中経済小説を中心に—」の三章で構成されている。第一章は、現在日本で市販

されているビジネス文書文例集 6 冊と中国の商務文書文例集 3 冊を対象に感謝表現の用例を収集して感謝表現の特徴を明らかにしている。両者とも「感謝型表現」が多用され、日本語ビジネス文書では「ありがとう」「お礼」「感謝」「深謝」の 4 つの基本形式、中国語商務文書では「感謝」「感激」「謝意」「謝忱」と口語の「謝謝」「多謝」の 6 形式が見られ、また、日本語ビジネス文書では感謝表現の形式と修飾語が豊富で「お例」と「感謝」の形式が多く、多重修飾語も見られるのに対して中国語商務文書の感謝表現の形式は単一的であり、修飾語を用いない場合が多いと指摘する。第二章は第一章で見られた日本語 3 種・中国語 5 種の感謝表現をキーワードとして日本と中国のメガバンクのホームページ内の検索エンジンを利用して調査した結果、日本の銀行ではビジネス文書とは傾向を異にして「ありがとう」類が圧倒的多数で「感謝」「お礼（御礼）」は少なく、中国の銀行では公式の社外文書・お知らせ・案内類に「感謝」の使用が多数であり、「謝謝」は文書の末尾に使用され、また文頭挨拶の感謝表現が見られないことを指摘している。第三章は、ビジネスの会話場面における感謝表現の使用実態を解明するために自然なビジネス会話を反映させて創作されたと考えられる日本と中国の経済小説 8 冊を資料として調査し、日中ともに感謝型表現が最も多く、特に中国の経済小説において割合が高く中でも「謝謝」が多く、また日本の経済小説に謝罪型表現、省略表現が多いと指摘する。

第二部は第四章「近現代商用文における漢語の感謝表現について」、第五章「近現代商用文における感謝表現―「かたじけない」の消滅につ

いて一」、第六章「近現代商用文における「ありがたい」について」の三章で構成されている。第四章は近現代の商用文の文例集において「感謝」「感激」「感佩」「感銘（肝銘）」「謹謝」「厚謝」「幸甚」「謝」「謝意」「謝恩」「深謝」「多謝」「拝謝」「万謝」「鳴謝」「（お／御）礼」「（御）厚礼」の17種類が使用され、このうち「（お／御）礼」の使用が頻繁になるのに対してそれ以外の漢語の感謝表現が減少の趨勢となり、ことに戦後「鳴謝」「感佩」「厚謝」「万謝」「謹謝」「多謝」が文例集から消滅し、「（お／御）礼」と和語の感謝表現が主流となる史的変遷を指摘する。第五章では近現代の商用文例集で連用修飾に「かたじけなく」とそのウ音便の「かたじけなう」およびサ変複合動詞「かたじけなくす（かたじけなうす）」が昭和末期まで残存したが謙遜による曖昧さと感謝・恐縮専用の表現の使用により消滅した過程を明らかにしている。第六章は、候文体における漢文風の転倒表記「難有」が商用文の口語化によって徐々に漢字仮名交じり表記へと変化し、また戦前まで使用された「有り難き仕合せ」の戦後における消滅を指摘している。

第三部は第七章「ビジネス日本語教科書における感謝表現の扱い—中国の商務日本語教材を資料として—」の一章で、第一部の日中感謝表現の実態調査に基づいて、中国の高等教育機関における「商務日本語教材」の現状を紹介し、現行の「国家級企劃教材」9種計15冊における感謝表現の扱いを分析して①感謝表現の課題・ストラテジーとしての内容の統合、②感謝の使い分けの工夫、③教師の指導力の向上、④補助教材の使用の4点の改善を提言する。

終章においては、本論文で行った分析をまとめ、今後の課題を述べている。

論文審査の結果の要旨

本論文は、現代日本語の文法研究において、従来ほとんど研究対象とされてこなかったビジネス場面における感謝表現の実態を解明するために、多様なビジネス言語資料を調査して、特に日本語と中国語との対照研究の視点および近現代 150 年に及ぶビジネス文書の史的変遷の視点から感謝表現を究明した研究であり、ほとんど未開拓の新分野を意欲的に追究した研究として高く評価することができる。

序章「感謝表現の先行研究と本論の概要」では、主として口語を中心とする先行研究における定義・分類の確認を踏まえて文書と会話に亘るビジネス言語資料を対象とする本研究における感謝表現の分類を行っているが、分類のための枠の設定にあたってどのような取捨選択をしたのかについて、なお検討の余地がある。

第一部「ビジネス場面における感謝表現の日中対照研究」は三章で構成され、日本語と中国語のビジネス場面の言語資料における感謝表現の実態を分析してその異同を明らかにしている。第一章は、日本のビジネス文書文例集 6 冊と中国の商務文書文例集 3 冊を調査資料として日本語と中国語における感謝表現の特質の相違を対照研究した点は斬新で評価することができる。資料として使用した日中あわせて 9 種の文例集の選択基準に

言及がないが、例えば用例数の多寡を論ずるためには各冊の分量や資料性の相違についての言及に留意すべきであったと思われる。ことに中国の商務文書の変遷史自体が未開拓の分野であるだけに感謝表現をはじめとする言語の共時的また通時的な実態の解明は今後の研鑽に俟つことになる。なお「お世話」「おかげ」を「事実関係の叙述の表現」としているが、先行研究における分類との整合性についてなお再検討を要するといえる。第二章は、企業と個人の情報に配慮して可能な範囲で公開されたビジネス文書の分類でほぼ社外文書に相当してしかも架空や創作ではない現実の資料である日本と中国のメガバンクのホームページにおける感謝表現の相違が実証的に解明しており、有益な調査結果が示されている。用例の扱いの面で日本の銀行のホームページにおける「お礼」と「御礼」について敬意の相違の有無も含めた考察が望まれるところである。第三章も企業秘密と個人情報観点から録画や録音などの方法による実際の言語状況を反映する資料が入手しにくいビジネスの現場での会話に準ずる資料として日本と中国の経済小説を取り上げてあり、これも先駆的な研究であるといえる。ただ、すでに半世紀の歴史が有り今日盛行して作家や業種の多様化の著しい日本の経済小説のうち第三章で調査資料として取り上げた作品の作者が池井戸潤に偏っており、日本語学習者にも人気・知名度の高い作者ではあるものの、研究結果に普遍性を持たせるためにも今後、経済小説の作品選択に研究対象の拡大が望まれる。中国の経済小説はまだその歴史が始まったばかりであるが、いち早くこれを言語資料として活用しており、まさに独擅場の観をなしている。

第二部は三章から成り、近代を通じて候文体から口語体へと変遷してきた商用文における感謝表現の史的変遷を商用文の文例集から分析しており、従来の感謝表現の変遷史の扱わなかった資料分野であるだけに同時期の口語とは異なる様相を解明しているところに本研究の価値がある。第四章では近現代商用文における「感謝」「感激」以下の17種の漢語の感謝表現の年代的な変遷が解明されており貴重な成果であるといえる。ことに第五章の「かたじけない」が昭和末期まで残存していたとする指摘とその消滅の原因の考察がなされていてビジネス文書の特質の考察に貢献すると思われるが、平成期まで調査を広げて論拠をより確実にすることが望まれる。第六章は先行研究の蓄積のある「ありがたい」について候文体から口語体に亘る近現代商用文における実態を調査して表記と用法の特徴について考察を加えてあり、「ありがとう」を独立した定型表現で使用されるようになったのが昭和初期頃であることを明らかにしたのも有益である。

第三部に収める第七章は、感謝表現の現代における日中対照言語学的研究法と近現代商用文における史的変遷の追究の双方に跨がる本研究の成果を、ことに中国の高等教育における日本語学習者に還元すべく商務日本語教材の現状を改善するために現行の「国家級規畫教材」9種計15冊における感謝表現の扱いを分析して問題点を洗い出している。これを踏まえて具体的な改善策が四項目に亘って提案されているが、その有効性はさらにビジネス日本語教育の実践を伴うことで保障される性格のものである。

本論文は以上の第一部・第二部・第三部に亘る意欲的な考察によりビジネス日本語における感謝表現の特質の解明に貢献する研究として高く評価することができる。

よって、本論文の提出者、周乗風は、博士（文学）の学位を授与せられる資格があるものと認められる。

平成 30 年 12 月 17 日

主査 國學院大學教授 諸星美智直 ㊞

副査 國學院大學教授 吉田永弘 ㊞

副査 國學院大學大学院客員教授 カイザー・シュテファン ㊞

周 乗風 学力確認の結果の要旨

下記3名が各専門分野からそれぞれ学力確認の試験を行った結果、
博士（文学）の学位を授与される学力があることを確認した。

平成30年12月17日

学力確認担当者

主査 國學院大學教授 諸星美智直 ㊟

副査 國學院大學教授 吉田永弘 ㊟

副査 國學院大學大学院客員教授 カイザー・シュテファン ㊟